

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01257

研究課題名(和文)「混成言語」を通してみるユーラシアの諸言語—言語接触と言語生態—

研究課題名(英文) Research on "mixed languages" in Eurasia with a focus on language contact and language ecology

研究代表者

藤代 節 (Fujishiro, Setsu)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：30249940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：ユーラシアの諸言語間の多様な言語接触のあり方を「混成言語」という観点からとらえ、日本を含むユーラシアの各地の言語を研究対象としてきた研究者等が地域を分担し2021年度から3年間の予定で取り組んだ研究である。2019年度末から猛威を振るったCOVID-19の影響で、2020年度、2021年度を中心に研究方法のかなりの部分を見直さざるを得なかったが、研究分担者、研究協力者は、対象地域の言語接触状況についての知見を有していたため、研究を続行し、本科研主催もしくは共催のシンポジウム2回(1つは国際)、複数の研究会や国際ワークショップを行った。研究成果冊子をCSELシリーズ第24巻として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ユーラシアの夥しい数の言語の中で、歴史比較言語学的手法で言語の分岐についてなどの語史の解明も進む印欧諸語に比べて、多くの非印欧諸言語、特に現在、話者数が極めて少ない小言語やピジンなどを含む小言語の生態については研究が多いとは言えない。本研究では当該言語圏の言語外の社会情勢なども考慮しながら、言語接触や言語取替において常に生じる混成した言語を視野に入れて言語の多様な生態に迫る。

研究成果の概要(英文)：Considering the state of diverse linguistic contact among Eurasian languages from the perspective of "mixed languages," the members of this project who have studied the languages of various areas over Eurasia, were in charge of the areas respectively and worked on this research for 4 years from FY2019. Due to the impact of COVID-19, which raged from the end of FY2019, we had to revise a considerable part of our research plan, mainly in FY2020 and FY2021, but since we, co-investigators and research collaborators, had knowledge of the language contact situation in the target areas based on our research for many years, we could continue this research project, where we held two symposia, one of which is international and three workshops and others. We were able to publish the research results as the 24th volume of Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) series. Many other results are sited in the following passages.

研究分野：言語学

キーワード：混成言語 ユーラシア 言語接触 危機言語 二言語併用 借用語 方言 言語取り替え

1. 研究開始当初の背景

ユーラシアの諸言語には、同系統の言語が分岐し、死語となった言語も含みつつも比較的整った形で分布を広げ現代語として使用されている印欧諸語がある一方、系統の不明な言語、即ち極東の日本語、朝鮮語、欧州のバスク語等もある。さらに、様々な系統の言語が長期間にわたり接触した結果、複数の言語併用がついには言語の統合に結びつく場合もあり、新言語の形成がある一方、少数派言語の消滅も見られる。言語の歴史については20世紀の大半を通して歴史比較言語学の手法を用いた研究が主流であったが、印欧語分布域を除けば、むしろ系統を異にする言語の接触が言語変容の誘因となる場合も少なからずある。直接的に言語の接触状態が表層に現れる例としては、ピジンが代表的である。これらは、「混成言語」として、形成に関与した(大抵は話者数の大きい)大言語から逸脱した形をもち、刹那的に使用される一種「際物」の言語としての扱いを受けてきた。おそらくはこの種の言語の多くは記録されることなく、社会情勢の変化などにより、消滅していったのだろう。言語は変化するものであるが、その変容の契機はさまざまである。変容に絶えず誘因を提供しているのは一つには異言語との接触であり、これを経た言語変容により形成されるのは様々なレベルでの混成言語である。このような言語が「無標」な言語ではないか。

本科研に先行する科研費による研究ではユーラシアの諸言語を対象に、歴史比較言語学的アプローチを基盤の一角に据えながら、「混成言語」と捉えることが可能な言語を抽出し、そこに起こる言語接触を観察してきた。本研究課題では、言語の混成の元となった多数派の言語と混成言語の関係をあらためつつ、更に多岐にわたる社会的文化的要因を捨象せず、まず各事例を個別に、次にユーラシア全域をカバーして、その生態にはどのような類型がみとめられるか等、取り組むべき課題があった。

2. 研究の目的

本研究では、先行科研での研究に引き続き、ユーラシアの諸言語を「混成言語」をキーワードに見なおし、先行科研で得られた混成言語の言語学的分析に加えて、社会的文化的要因がどのようにこれら言語の生態に影響を及ぼすのかを探ることが目的であった。そのために、これら要因には、政治的、経済的、また自然環境上の要因、また、多種多様な文化的現象が誘発する社会現象を含むものととらえることとした。言語接触に起因する言語の混成は、「混成」という表現がもたらすイメージにも影響され、標準語の対極にあり、一時避難的に使用される言語として捉えられる傾向がある。しかし、そもそも、一つの言語コミュニティが同種の言語を基盤として、「発展」し、同系統の言語へと分岐して広域に広がっていくという言語のあり方は、実際の言語コミュニティのあり方と使用言語の関係を写し取るには成功していないのではないか。所与の言語コミュニティが単一言語使用であったとしても、その言語変容の契機は、むしろ他言語との様々な形での接触に誘発される。その際に生じるのが広義の混成言語である。

たとえば、極北シベリアのタイムル半島では、ロシア人商人や帝政ロシア政府の官吏等と先住民(例えばサモエード系のガナサン人)との間でコミュニケーションを取る際には、ロシア語ベースのタイムル・ピジンと称される混成語がかつて使用されていたが、20世紀初頭までには、ほぼ消滅した。また、ピジンは、世界各地に記録がある。近年もロシア語ベースで中国語が「混じった」キャフタのピジンの報告が出た(cf. ポポワ I.F., 高田時雄 *Словарь кяхтинского пиджина*, 2017)。このピジンには、漢字でロシア語を音写した辞書等も作成されていたが、商業上の目的が潰えたため、短い期間で消滅した。一方、チュルク系の言語ヤクート語は、東シベリアの広域に分布するが、中央アジア域を中心に多くの話者を持つ同系のチュルク系諸言語群とは音韻、文法、語彙のレベルにおいて大きく異なる。そのことは、この言語が現在の分布域に移動するまでの過程でいくつかの異系統言語と接触、あるいは混成した結果とみることもできるだろう。やがて、共通のコミュニケーションツールを編み出し、言語が確立した時期にはコミュニティがまとまっていたため、今日のヤクート語として認識される言語となったのではないか。ヤクート語が通過してきた過程には夥しい「混成言語」が生じては消えるという場面があったであろう。

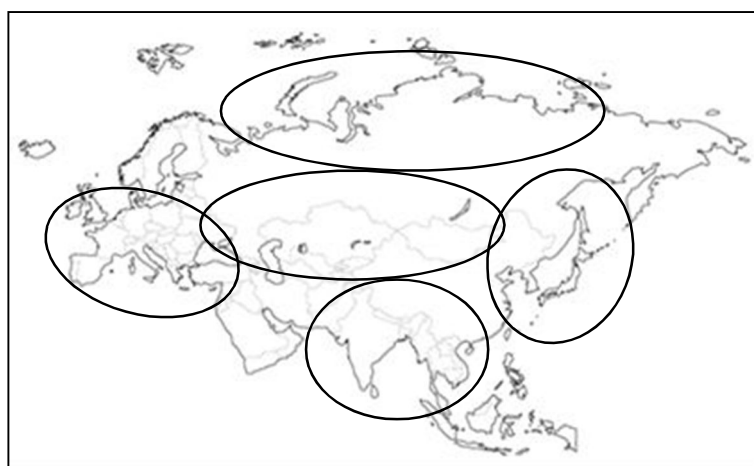
本研究課題では、混成言語をキーワードに先行する3カ年におこなった研究の成果(具体的な成果内容については後述)を更に深く発展させる。今回の課題では、ユーラシア各地の言語が置かれた社会的文化的環境に留意し、現時点では大言語(多くの場合、話者の多い多数派の言語)となっている「混成していない言語」からの逸脱を意識しながら、「混成言語」の生態を多角的に観察する。既に混成言語を見極めるといふ言語分析の視点で研究を行っている言語研究者グループによる成果の上に、更に社会・文化的視点を加え、当該言語圏における地域性・時代性に即した情報を加味して行う調査・研究であり、一つの言語が分岐していったとは限らない、異なる系統の言語が興亡を繰り返したユーラシア各地の言語のあり方に新しい視点や、多様な言語接触の諸相の提出を目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、12名の言語研究者に1名の情報工学研究者が加わり、研究に取り組んだ。12名の言語学研究者をユーラシアの東・西・南・北・中央のゾーンに分けて配置し、1名の情報工学研究者は、言語情報処理班として参加する。各人の主な担当ゾーンと言語は以下のとおりである。[ユーラシア大陸を5つのゾーンに区分した。]

東ゾーン：中国、極東：早津恵美子、岸田文隆、沈力、川澄哲也* // 西ゾーン：欧州、コーカサス地方：吉田浩美*、岸田泰浩 // 南ゾーン：東南アジア・南アジア：澤田英夫 // 北ゾーン：ロシア連邦域(ロシア語圏)：藤代節、松本亮* // 中央ゾーン：中近東、中央アジア、チュルク語圏、蒙古語圏：菅原睦、大崎紀子*、角道正佳* // 言語情報処理班：片山修
(*は、研究協力者。)

概ねのゾーン範囲は以下の図のとおり。



それぞれの主な分担言語は以下のとおりである。

東ゾーン：<日本語圏・朝鮮語圏・漢語圏> 早津(孤立語としての日本語、現代日本語の諸相)、岸田(文)(孤立語としての朝鮮語、日本語と朝鮮語の共通特徴の再見、ツングース系の中の満州語あるいは支配言語としての満州語、対馬宗家文書の言語)、沈(山西省の漢語変容、漢語圏の少数民族言語)、川澄(五屯語、倒話等漢語圏の混成言語、漢語基盤のビジン)

西ゾーン：<印欧語圏(西仏露語圏)、コーカサス諸語圏> 吉田(バスク語、バスク語諸方言)、岸田(泰)(印欧語の中のアルメニア語、南コーカサス諸語の中のグルジア語)

南ゾーン：<チベット=ビルマ語圏> 澤田(ランスー語、マインター語など、チベット=ビルマ諸語の中の混成言語)

北ゾーン：<露語圏> 藤代(ドルガン語、ヤクート語等のチュルク諸語、ロシア語圏の言語)、松本(エベンキ語等ツングース系諸語、ネネツ語などサモエド系諸語)

中央ゾーン：<チュルク語圏、露語圏> 大崎(キルギス語とカザフ語等、チュルク系言語内の混成)、菅原(ウズベク語とその基層言語としてのイラン系言語の関与、チャガタイ語、古代語を含むチュルク諸語全般)、角道(中国西域の蒙古系小言語)

言語情報処理班：片山(多言語データを納めるウェブサイト整備、画像映像記録処理)

研究方法としては、補助金繰り越しを含む4年間(2019年度~2022年度)のうち、2020年度、2021年度はCOVID-19の影響により、予定していた現地調査はことごとく難しくなり、また、2022年2月に勃発したロシア軍のウクライナ侵攻の影響により、ロシア国内に分布する言語の現地調査もほぼ不可能となった。このことは、研究方法とスケジュールに大きな影響を及ぼしたが、研究に参加した研究者等はそれぞれが有している言語データ、あるいは、文献などを駆使して研究を進め、あるいは、オンラインツールを利用した調査も活用するなど工夫して研究を継続した。

研究実施機関内に複数回行った研究会、ワークショップなどでは、分担地域からの研究トピックの提出に加えて、それぞれのメンバーが研究手法として精通しているアプローチによる知見を以て研究討議を牽引した。例を挙げれば、澤田はフィールド言語学、早津は日本語学理論、岸田(文)と菅原は文献言語学、岸田(泰)と沈は言語類型論、統語論、等。

混成言語的特徴がどこに現れるのか、言語類型的・社会的・文化的な環境という視点を保ちながら整理し、どのゾーンにおいても常に「混成」の下敷きとなった多数派言語との関係を言語使用状況を含む言語生態の視点から捉え、「混成言語」の出現から消滅あるいは言語コミュニティ形成に至る過程を追った。各ゾーンには歴史を遡って言語使用状況が判明している言語、また現在、まさに混成が出現しつつある言語など、言語の混成という視点に立てば、生態が浮き彫りになる言語が散見された。

4. 研究成果

ユーラシア諸言語圏の研究対象としてきたいいくつかの言語の中には、混成をリアルタイムで観察できる事例や、混成言語の存在の確認からその消滅までの「生態」が窺える例などがあつた。それは研究に参加したメンバーの書籍、論文などとして、多数が公刊されており、研究発表についても少なからぬ国際学会発表などを含め、活発に成果としてあげることができた。(「5. 主な発表論文等」の項目を参照されたい。)

以下には各ゾーン及び班における研究成果概要を研究参加メンバー毎に掲げる。

東ゾーンの岸田(文)は、近世期に朝鮮語の教育が行われていた対馬と薩摩苗代川で編纂・使用された朝鮮語学書の発掘を先行科研で手がけてきたが、十分な調査が未だ行われていない対馬宗家文書や朝鮮語大通詞小田幾五郎関連文書、薩摩苗代川の大武文庫文書の調査を実施し、混成言語の観点からデータを分析した。更に本国の朝鮮語とどのような点が異なるのかを明らかにしていく。日本語と朝鮮語の過去の混成の研究とともに、日朝の現代語の接触のあり方についても示唆にとむ結果をもたらす研究に取り組んだ。また、早津は、特定の言語との接触に限らず、現代日本社会の多言語多文化性と日本語の多様性を認識しつつ、豊富な日本語研究の知見に基づき、現代日本語の文法、語彙について多角的に研究を進めた。沈力は、中国語諸方言を含み、中国語圏内の少数民族言語に関する研究にも取り組んだ。川澄は中国領内の混成言語に関心をもちつつ、漢語方言について研究を進めた。

西ゾーンの岸田(泰)は、19世紀にアナトリア方言ベースで成立した西アルメニア語と同じくアララット方言(旧ソ連邦アルメニア共和国内)をベースとする東アルメニア語とに分かれるアルメニア語を扱う。東西アルメニア語にはその元となった古典アルメニア語の特徴における異同(例えば、主格と対格の形式の有生性なども絡むバリエーションやバルカン言語連合との共通点)など、民族の移動にともなう他言語との接触による変容が見られるが、特にディアスポラ後の言語生態の観察と分析に取り組んだ。また、吉田の研究対象とするバスク語圏では、近年、スペイン語の影響を受けたバスク語を *euskano* (エウスカニョル) と称し、*euskara* (バスク語) と *español* (スペイン語) の混成語とする解釈がある。既に研究がいくつかなされている(Lantto, Hanna: 2015 など) が、多くは、コードスイッチングの面からの談話分析、借用語のピックアップが主である。そこで、統語的な影響や言語使用の文脈で無意識に混成言語使用として現れる影響について観察し、この新しい言語がどのようにバスク語圏で扱われていくのかを見極め、世代間の言語使用の異なりが反映される文法現象を丁寧に取り上げ、現在、変容を続けるバスク語使用を扱った。

中央ゾーンの菅原は、多重言語使用が文語でも口語でも常態であった地域にあって、中期チュルク語文献へのペルシア語要素の混成について、翻訳文献を中心に研究を進展させた。また、大崎は、現代キルギス語文法について、COVID-19 の中ではあつたが国内在住の母語話者から言語情報を積極的に得て、活発に研究を発表した。角道は中国西域に位置する蒙古系小言語について周辺の言語との接触の視点を持ち取り組んだ。

南ゾーンの澤田は、異系統言語間はもちろん同系統言語間でも複雑に接触が見られる地域でランスー語等いくつかの小言語について既に調査研究を行っているが、継続して一次資料を収集しつつ、社会的文化的環境のファクターを加えてチベット=ビルマ系言語間の接触の諸相について分析を試みた。

北ゾーンの松本は、ネネツ語を中心としたツングース、ハンティ、コミなどの周辺言語との接触と影響の授受を扱い、20世紀までの数世紀に徐々にロシア語圏内に含まれた少数言語の興亡に絡む諸言語を研究し、特にハンティ語について研究を進めた。藤代はドルガン語の生態について、民族の形成と言語の形成さらには消滅に関わる生態について研究をまとめた。

言語処理班の片山は、本研究課題の成果冊子である *Contribution of Studies of Eurasian Languages (CSEL) Vol. 24* 等を掲載している Web ページ <http://el.kobe-ccn.ac.jp/csel/> の保守管理などを行い、ICTと言語情報処理について研究を重ねた。

20世紀末頃から国内外で関心を集め盛んになった少数民族言語研究で特に危機言語のドキュメンテーションが格段に進み、言語学的分析を伴った多くの研究が蓄積されつつある延長線上に本研究は位置している。それらの研究に参加しつつ知見を蓄積してきた本研究の参加メンバーは、ユーラシアの諸言語間の接触や言語取り替えの諸相について、混成言語を視野に入れ研究を行い、それぞれの分担地域やターゲットとした言語とその周辺の言語について、個々に多くの研究を発表し多様な言語現象を観察、分析することができた。

一方、COVID-19 や、ロシア軍のウクライナ侵攻に限る訳ではないが各国の政治的情勢の影響を大きく受けた研究期間であったため、個別に各地域の言語について把握した言語現象を当該言語の使用地域で直接に検証する段階に進むことはかなわなかったことは残念であった。

COVID-19 をまずは主要因とする言語による意思の疎通が全世界で大きく阻まれた直近のこの2,3年がユーラシアの多くの小言語圏にどのような影響を及ぼしたか、長い歴史の中で幾度かは勃発したと思われる現象、即ち、言語に顕著な変容を来すこのような事態が21世紀のユーラシア諸言語の生態に如何に反映されたかという点から分析する機会をいずれ持つことを期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 30件 / うち国際共著 4件 / うちオープンアクセス 30件）

1. 著者名 王 土育 程・沈力	4. 巻 Vol. 166, No. 1
2. 論文標題 山西中部方言麻韻三等字元音の曲折変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語文研究（山西省社会科学院語言研究所）	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 15
2. 論文標題 単語の語彙的な意味と文法的な性質 - 多義動詞ツトメルを例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 157-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岸田文隆	4. 巻 10
2. 論文標題 鍵屋歴史館所蔵「書状集」について - 薩摩苗代川伝来朝鮮語学書「韓牘集要」との比較 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 譯學gwa 譯學書	6. 最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 SAWADA Hideo	4. 巻 17
2. 論文標題 Mr. Lamaung Khao Hhao 's Memoir of His Life: Until His Graduation of High School	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 151-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/122480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤田英夫	4. 巻 -
2. 論文標題 ロンウォー語の事象キャンセル	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 加藤 昌彦 (編) 『東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル』	6. 最初と最後の頁 189-214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田英夫、林範彦	4. 巻 2
2. 論文標題 チベット・ビルマ諸語の参照文法書目録 [抜粋版]	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 渡辺己、澤田英夫 (編) 『参照文法書研究』 (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊)	6. 最初と最後の頁 149-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/116964	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 澤田英夫	4. 巻 2
2. 論文標題 インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 渡辺己、澤田英夫 (編) 『参照文法書研究』 (アジア・アフリカ言語文化研究 別冊)	6. 最初と最後の頁 121-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/116963	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原睦	4. 巻 23
2. 論文標題 クトゥブ『ホスロウとシーリーン』におけるオグズ要素について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究』 (CSEL23)	6. 最初と最後の頁 111-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大崎紀子	4. 巻 23
2. 論文標題 キルギス語再帰動詞再考 『マナス』と現代語テキストとの比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 久保智之ほか(編) 『アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究』, CSEL (Contribution to the Studies of the Eurasian Languages series)	6. 最初と最後の頁 95-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本亮	4. 巻 2
2. 論文標題 ウラル諸語の文法書について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 渡辺己・澤田英夫責任編集 『参照文法書研究』 (アジア・アフリカ言語文化研究別冊)	6. 最初と最後の頁 201-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 24
2. 論文標題 寺村(1982)の「コトの類型」と森山(1988)の「格の類型」 結合価をふまえた叙述内容や格パタンの類型の研究 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 21-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 5
2. 論文標題 日本語の使役文および使役文の研究 使役文の文法的な意味の捉え方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語誤用と日本語教育研究 (浙江工商大学出版社)	6. 最初と最後の頁 47-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 岸田文隆	4. 巻 2424
2. 論文標題 対馬鍵屋歴史館所蔵ハングル書簡集「片紙集」の成立年について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原睦	4. 巻 24
2. 論文標題 クトゥブ『ホスロウとシーリーン』第7章 - 第9章	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 147-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sugahara Mutsumi	4. 巻 0
2. 論文標題 Two Middle Turkic Translations of 'Attar's 'Memorial of the Saints'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Esengu Bitig. .Dogumunun 60. Yilinda Zuhai Olmez Armagani	6. 最初と最後の頁 719-731
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 菅原睦	4. 巻 60(2)
2. 論文標題 ナヴァーイーの『篤信家たちの驚嘆』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『東洋学術研究』	6. 最初と最後の頁 279-294
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角道正佳	4. 巻 24
2. 論文標題 モンゴル諸語における語幹末のn	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 87-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角道正佳	4. 巻 3
2. 論文標題 土族語互助方言の自己性 - 動詞接尾辞-waは自己性標識である -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特点対照研究会 (編) 『言語の類型的特点対照研究会論集』	6. 最初と最後の頁 59-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 OHSAKI Noriko	4. 巻 2424
2. 論文標題 Function of the third-person possessive suffixes in time adverbial phrases in Kyrgyz	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 125-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 OHSAKI Noriko, EBATA Fuyuki	4. 巻 0
2. 論文標題 Verb-Verb Complexes in Central and Eastern Turkic Languages	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Kageyama, Taro, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) Verb-Verb Complexes in Asian Languages, Oxford University Press	6. 最初と最後の頁 430-454
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/oso/9780198759508.003.0016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 OHSAKI Noriko, Akmatallieva Jakshylyk	4. 巻 22
2. 論文標題 Volitionality and Kyrgyz auxiliary verbs kor- and jiber-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Sato, Kumiko and Kogura, Norikazu (eds.) Aspects of Turkic Languages: Phonology, Morphosyntax and Semantics, CSEL (Contribution to the Studies of the Eurasian Languages series)	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 24
2. 論文標題 バスク語アスペイティア(Azpeitia)方言の助動詞と動詞語彙に関する世代間の相違	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series ユーラシア諸言語の動態 言語接触・混成言語・言語生態	6. 最初と最後の頁 197-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Petrov, A.A., Fujishiro, S.	4. 巻 0
2. 論文標題 Russian-Japanese studies of the Tungus-Manchu and turkic languages of the North (Late 20th - early 21st century)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Aricti in a space of knowledge, The collection of Saint Perersburg State University Science Events Articles (2020-2021)	6. 最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 21
2. 論文標題 日本語の授受文の表す恩恵授受性 使役文の表しうる恩恵授受性との関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series: Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸田文隆	4. 巻 21
2. 論文標題 富山市立図書館山田文庫所蔵「朝鮮口聞書」解題ならびに翻刻	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 21-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角道正佳	4. 巻 21
2. 論文標題 モンゴル諸語の「生まれる」を表す表現	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 49-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川澄哲也	4. 巻 21
2. 論文標題 漢語甘溝方言のテキスト -Zhu et al.(1997)所収データの改訂版-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 75-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 澤田英夫	4. 巻 21
2. 論文標題 北部ビルマ下位語群の言語ランスー語の借用語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 97-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Noriko OHSAKI	4. 巻 21
2. 論文標題 The peculiarity of the Kyrgyz word art 'back' among positional terms	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 125-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原睦	4. 巻 21
2. 論文標題 クトゥブ『ホスロウとシーリーン』第5章・第6章	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 133-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岸田泰浩	4. 巻 21
2. 論文標題 未来の出来事に言及する現代アルメニア語の動詞形式について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 151-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉田浩美	4. 巻 21
2. 論文標題 スペイン領バスク自治州の4自治体における高校生のバスク語の使用状況 社会的側面と文法的側面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 177-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤代節	4. 巻 21
2. 論文標題 研究ノート:P. F. ポリヤージン『ヤクート語ロシア語辞書』(1877年)より「序」(和訳)、「使用の手引き最重要事項」(原文テキストと和訳)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series Dynamics in Eurasian Languages III Diversity, Typology and Mixed language	6. 最初と最後の頁 215-230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 1
2. 論文標題 名詞と使役動詞(V-(サ)セル)からなる連語	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東アジア国際言語研究	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 プレ創刊号
2. 論文標題 使役動詞(V-(サ)セル)の語彙的・文法的な一単位性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京外国語大学国際日本学研究	6. 最初と最後の頁 57-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 早津恵美子	4. 巻 24
2. 論文標題 日本語のヴォイス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川澄哲也	4. 巻 39(2)
2. 論文標題 陝北山歌『信天游』における1人称代名詞“奴”について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化研究(松山大学総合研究所)	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本亮	4. 巻 21
2. 論文標題 (研究ノート)ハンティ語の音声音韻の特徴についてー言語フィールド調査からのまとめ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸山手大学紀要	6. 最初と最後の頁 115-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計70件(うち招待講演 7件/うち国際学会 19件)

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 形態素は意味を持つ必要があるのか：中国語の述語形式の形成を中心に
3. 学会等名 中日理論言語学研究会主催シンポジウム「言語類型論から見た「語」の本質」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鴨井修平・沈力
2. 発表標題 西日本諸方言話者におけるアスペクト形式のスイッチング
3. 学会等名 日本方言研究会第114回研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 動作動詞の属性叙述機能について -主題標識のない中国語の工夫-
3. 学会等名 日本言語学会第164大会ワークショップ「叙述類型研究の新たな試み -非典型的 な事象叙述・属性叙述をめぐって-
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 (S. Fujishiro)
2. 発表標題 (1882-1923) 「K.M.ルイチコフ(1882-1923)の辞書にみるドルガン語見出し語彙の諸特徴」
3. 学会等名 (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 日本語の授受構文の形式と意味 -「てもらう」構文について-
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岸田文隆
2. 発表標題 鍵屋歴史館所蔵「書状集」について 薩摩苗代川伝来朝鮮語学書「韓牘集要」の淵源
3. 学会等名 第13次 国際訳学書学会国際学術会議「近代東アジアの言語学習と通翻訳」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 カチン語の「ラチッ」と雲南の「勒期」 - 音韻上の相違
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 日本語の動作動詞の属性叙述機能について
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 中期チュルク語の動詞形式 -(i)p tur(ur)について - 完了と証拠性との間で -
3. 学会等名 共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理 音韻・形態統語・意味のインターフェイス 」2022年度第2回研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 チュルク語の動詞形式 -p tururと-a tururについて
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岸田泰浩
2. 発表標題 アルメニア語の動詞活用とEvidentialityについて
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 角道正佳
2. 発表標題 チベット語からの2種類のモンゴル語訳Subasidiに見られる語幹末の n/ゼロ 交替
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大崎紀子
2. 発表標題 キルギス語品詞論にまつわる問題 - bar「ある」とjok「ない」-
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最新のフィールドワークから(バスク語アスペイティア方言)
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松本亮
2. 発表標題 ネネツ語およびハンティ語における数について
3. 学会等名 2022年度ユーラシア言語研究コンソーシアム 「ユーラシアの言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 (Alexandr Petrov), (Setsu Fujishiro) 藤代 節
2. 発表標題 - (XX - XXI . -
3. 学会等名 " (国際学会) "
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤代節
2. 発表標題 藤代節 ドルガン語の悲しみの表現について
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会 「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 (Fujishiro Setsu)
2. 発表標題 XX :
3. 学会等名 > (国際学会) <
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤代節
2. 発表標題 『ドルガン語ロシア語辞書（10-11年生用学習辞典）』（2019年、A.A.Barbolina, N.S.Kudrjakova N.、N.Zharkova, 他著）について
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤代節
2. 発表標題 ルチコフのドルガン語辞書に見られる単語扱いの2単語語彙
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 結合価研究と奥田靖雄の連語研究
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 単語の語彙的な意味と文法的な性質 - 多義動詞「はたらく」について -
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 語結合（連語）とヴェレンツ（結合価）
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸田文隆
2. 発表標題 朝鮮語大通詞小田幾五郎編「虎説」と江戸期朝鮮語学書
3. 学会等名 第12次 国際訳学書学会国際学術会議「訳学書の新資料と訳学研究の拡大」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸田文隆
2. 発表標題 対馬鍵屋歴史観所蔵のハングル書簡集について
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 普語入声韻尾の消失に対するそのリティの影響
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 動作動詞の属性叙述機能について - 主題標識のない中国語の工夫 -
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 連続変調からみたチアン語の語形成
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 SAWADA Hideo
2. 発表標題 On borrowed words in Lhangsu, an undescribed Northern-Burmish language
3. 学会等名 The 53th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 ビルマ系言語の格標識を比較する
3. 学会等名 LingDyフォーラム ウェビナーシリーズ
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 カチン州のビルマ系少数言語の借用語彙
3. 学会等名 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」第5回合同研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SAWADA Hideo
2. 発表標題 Attempts to plot the source languages of village names on a map of Kachin State, Myanmar
3. 学会等名 2nd Workshop on Linguistic and Cultural Diversity in the Northeast India - Myanmar - Southwest China region (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 ロンウォー語の名詞類の文法化をめぐる問題
3. 学会等名 言語類型対照研究会 第15回発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 ビルマ文字の表音単位再考
3. 学会等名 オンライン公開ワークショップ「アジア文字研究術語の再検討」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 カチン諸言語におけるビルマ語のceH zuH 「恩恵」およびcaunH 「僧院」の借用
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 SAWADA Hideo
2. 発表標題 Differences between 'Lacid' and 'Leqi'
3. 学会等名 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 澤田英夫
2. 発表標題 カチン州の「ラチッ」と雲南の「勒期」 - 文法上の相違 (第55回国際シナチベット言語学会議 研究発表より)
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 中期チュルク語におけるペルシア語の名詞接尾辞-eについて
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 クトゥブ『ホスロウとシーリーン』における字余り・字足らず
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 いくつかのチュルク諸語における「テイル」表現
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 小田勝『古代日本語文法』（ちくま学芸文庫2020.5）について 非専門家の立場から
3. 学会等名 Luncheon Linguistics（東京外国語大学語学研究所）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岸田泰浩
2. 発表標題 Evidentialの統語構造について - アルメニア語の場合 -
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岸田泰浩
2. 発表標題 アルメニア語の動詞活用の統語構造
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 片山修
2. 発表標題 ICTにおける言語情報処理の現状
3. 学会等名 科研研究会 言語・人間・文化の「生態」 生老病死のその先へ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 角道正佳
2. 発表標題 保安語同仁方言の句内部の語順
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 角道正佳
2. 発表標題 東部裕固語の自己性
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎紀子
2. 発表標題 キルギス語の再帰動詞再考
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大崎紀子
2. 発表標題 キルギス語の二重補助動詞構文についての覚え書き
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大崎紀子
2. 発表標題 キルギス語における時を表す表現についての覚え書き - 約百年前のテキストと現代語の比較 -
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語教育の成果と現状
3. 学会等名 科研研究会 言語・人間・文化の「生態」 生老病死のその先へ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語(アスペイティア方言とセストア方言)の複合名詞のアクセント(中間報告)
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 バスク語アスペイティア方言の助動詞に関する世代間の差異
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田浩美
2. 発表標題 最新のフィールドワークから:バスク語アスペイティア方言の代名詞a(u)reとbea
3. 学会等名 科研費研究会 「混成言語」を通して見るユーラシアの諸言語 - 言語接触と言語生態 -
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本亮
2. 発表標題 ハンティ語の動詞前接辞についての問題点整理
3. 学会等名 2020年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松本亮
2. 発表標題 ネネツ語における進行progressiveを表すアスペクトについて
3. 学会等名 2021年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Setsu Fujishiro
2. 発表標題 Profiling Dolgan before its standardization
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 ヴォイスの教育と研究 使役文に表される恩恵授受性
3. 学会等名 立命館大学シンポジウム(多様化する日本語教育における文法教育の課題)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 使役動詞(V-(サ)セル)の語彙的・文法的な一単位性
3. 学会等名 中国海洋大学シンポジウム(言語全体を基盤として語彙論と文法論の繋がりを考える-言語単位を軸として-)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 早津恵美子
2. 発表標題 日本語の使役文および使役文の研究 使役文の文法的な意味の捉え方
3. 学会等名 中国人民大学シンポジウム(2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岸田文隆
2. 発表標題 対馬の朝鮮語学
3. 学会等名 国際訳学書学会第11回国際学術会議「東アジアの訳学政策」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原睦
2. 発表標題 チュルク諸語の否定表現から
3. 学会等名 「アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究」第5回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAWADA, Hideo
2. 発表標題 The Effects of borrowing on Lhangsu, a Northern Burmish language of Kachin State
3. 学会等名 2019 Theoretical Linguistics at Keio (TaLK) 『Myanmar Linguistics, State of the Art』(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田 英夫
2. 発表標題 カチンのビルマ系言語ロンウォー語
3. 学会等名 AA研フォーラム：言語研修（ジンポー語）文化講演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAWADA, Hideo
2. 発表標題 Loanwords in Lhangu, a Northern Burmish language in Kachin State
3. 学会等名 Workshop on linguistic and cultural diversity in the Northeast India-Myanmar-Southwest China region (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SAWADA, Hideo
2. 発表標題 Preliminary report of Tai Hsa, a Northern Burmish language spoken by a Shan tribe
3. 学会等名 The 52th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ohsaki, Noriko and Kumiko Sato
2. 発表標題 Notes on imperatives with the auxiliary verb k0r- 'to see' in Kyrgyz
3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaistic Conference (Chonbuk National University, Korea) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 述語の叙述機能についての表と裏 中国語と日本語の動作述語を例に
3. 学会等名 中日理論言語学研究会主催シンポジウム「叙述類型論のこれまでとこれから」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沈力
2. 発表標題 形容詞的屬性叙述功能与事件叙述功能 兼談漢日对比視角下的詞類問題
3. 学会等名 第八回当代語言學國際円卓會議(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 沈力・川崎廣吉
2. 発表標題 重構秦晋黄河沿岸諸方言的時空層次 以入声消失為例
3. 学会等名 第8回CASS-JSPS共同シンポジウム「2019日中言語学シンポジウム」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松本亮
2. 発表標題 ハンティ語の側面音についての考察
3. 学会等名 日本シベリア学会第5回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 藤代節	4. 発行年 2023年
2. 出版社 松香堂	5. 総ページ数 372
3. 書名 極北のチュルク系言語の「生態」 K.M.ルイチコフが遺した20世紀初頭のドルガン語辞書からみる言語の形成と消滅の危機	

1. 著者名 (編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 国立ロシア教育大学北方諸民族研究所・国立ロシア北東大学北東諸民族言語文化研究所・ユーラシア言語研究コンソーシアム	5. 総ページ数 578
3. 書名 () 『北方諸民族出身の研究者・作家・芸術家総覧(書誌便覧)』	

1. 著者名 早津恵美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ 言語研究の拡がりを見据えて』 「「カテゴリーカルな意味」をめぐる 奥田靖雄の連語論とカテゴリーカルな意味 - 」 pp.55-86	

1. 著者名 早津恵美子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学出版会	5. 総ページ数 381
3. 書名 『国際日本研究への誘い』 「あなたは日本語の文法を知っていますか」 pp.12-27	

1. 著者名 岸田文隆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 対馬鍵屋歴史館	5. 総ページ数 48
3. 書名 『(鍵屋歴史館所蔵 朝鮮語大通詞小田幾五郎編) 虎説【解題・翻刻・現代語訳】』	

1. 著者名 菅原陸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 『イスラーム文化事典』ことわざ，格言，決まり文句(トルコ)(pp.100-101)	

1. 著者名 早津恵美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 184
3. 書名 日本語ライブラリー 現代語文法概説(分担執筆「第2章 ヴォイス」)(pp.47-70を執筆)	

1. 著者名 早津恵美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白帝社	5. 総ページ数 234
3. 書名 日本語と中国語の副詞「日本語の使役文における副詞によるV-(サ)セルへの修飾」(pp.23-56)	

1. 著者名 早津恵美子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 外語教学与研究出版社	5. 総ページ数 594
3. 書名 日語語法研究(上)「第16章 現代日本語の使役文・使役動詞」(pp.560-585)	

1. 著者名 渡辺己、澤田英夫(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 269
3. 書名 参照文法書研究(アジアアフリカ言語文化研究 別冊02)ISSN 2436-9179	

1. 著者名 吉田浩美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 146
3. 書名 バスク語のしくみ 新版	

1. 著者名 松本亮	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 ツングース諸語、ウラル諸語 in Linguistic Atlas of Asia (Endo M., Minegishi M., Shirai S., Suzuki H., Kurabe K. eds.)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ユーラシア言語研究コンソーシアム
<http://el.kobe-ccn.ac.jp/csel/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	片山 修 (FUJISHIRO Setsu) (20295778)	神戸市看護大学・看護学部・准教授 (24505)	
研究分担者	岸田 文隆 (KISHIDA Fumitaka) (30251870)	大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・教授 (14401)	
研究分担者	岸田 泰浩 (KISHIDA Yasuhiro) (40273742)	大阪大学・日本語日本文化教育センター・教授 (14401)	
研究分担者	菅原 睦 (SUGAHARA Mutsumi) (50272612)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	早津 恵美子 (HAYATSU Emiko) (60228608)	名古屋外国語大学・世界教養学部・教授 (33925)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澤田 英夫 (SAWADA Hideo) (60282779)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603)	
研究分担者	沈 力 (SHEN Li) (90288605)	同志社大学・文化情報学部・教授 (34310)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	角道 正佳 (KAKUDO Masayoshi) (30144538)	大阪大学・日本語日本文化教育センター・名誉教授 (14401)	
研究協力者	吉田 浩美 (YOSHIDA Hiromi) (70323558)	神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員 (24501)	
研究協力者	大崎 紀子 (OHSAKI Noriko) (90419458)	京都大学・文学研究科・教務補佐 (14301)	
研究協力者	松本 亮 (MATSUMOTO Ryo) (30745857)	神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員 (24501)	
研究協力者	川澄 哲也 (KAWASUMI Tetsuya) (30590252)	九州大学・言語文化研究院・助教 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 4th International Symposium on Northern Languages and Cultures Siberian Languages: Research and Education	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 Workshop: Overcoming Health Difficulties in Life through Sibrian Traditional Culture and Language in Russia, Sakha-Yakutia, Amur region and Japan	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦				